朝鮮後期‘没落両班’の形象と時代的役割
－朝鮮後期の‘野談’に見られる様子を中心として－

崔　在佑

1.　はじめに

朝鮮後期、特に19世紀は激動の時期であった。それを物語る最も顕著な徴表は、実に堅固に見えていた身分制の動揺である[1]。18世紀以後、小数の家門が権力を握ることで、多数の両班[2]が権力から離脱していくことは、身分制の動揺を表している具体的な現象である。このような流れの中でも、両班は、量的には増加しており、その権威も依然として強固だった[3]。しかし、両班の量的膨張は、両班層の自己再生産が一定の役割を成してはいるものの、庶子層の編入や経済基盤の拡充に伴う中・庶層の上向移動なども主要な原因である。

経済的な成長を基盤にした中・庶層の上向移動が増える一方で、没落の道を歩む両班も多く発生した。いわゆる‘没落両班’の発生である[4]。実際に、韓国の古典文学の中から多様な没落両班の様子が確認できる。本稿は、時代の流れの中から生じた没落両班の様子を、文学的な立場から調べ、その形象化の意味を探るために行われる。文学が社会の反映であること、特に‘実際の見聞を記す’という野談集の意義を考えれば[5]、作品の中に描かれている没落両班の様子は、落ちぶれた人々の姿を見せてくれる単なる表現に留まらない。それは、朝鮮後期社会の時代的な現象を表す断面として受け入れてもいいだろう[6]。

[1] 朝鮮後期の社会においては、賦役の責任を担っていた下層民の身分の上向移動が深化される。それに伴い、両班・中人・常民・賤人によって構成されていた身分構造にも数値の変動が現れた。全炯澤、「身分制の弛緩と身分の変動」、『新編 韓国史』34、国史編纂委員会、2013、13頁。

[2] 両班とは、高麗・朝鮮時代の支配層を意味する。はじめは、官制上の文班と武班を指す概念として使われたが、高麗末・朝鮮初期からは官制上の文武班だけではなく、支配層の身分を称するケースが多くなる。朝鮮前期の両賤制から壬乱以後の班常制への変化に伴い、両班の権威が前期と比べ後期のほうが強固となったと言われている。

[3] 朝鮮後期に両班の数字が増加したことについて、それはただ帳籍上の冒称幼學が増加したという現象にすぎないとの指摘もありうる。しかし、帳籍に記載される内容である職役及び婦女の呼称が意図的に冒錄された場合があるとしても、それが錯誤でない限り、それ自体が中世解体期の社会変動の実情を反映していると見做されている。限界はあるものの、国家が把握した職役を通して社会構成の変動を理解することは大事なことであり、帳籍は何より大切な資料であると理解されている。全炯澤、「身分制の弛緩と身分の変動」、『新編 韓国史』34、国史編纂委員会、2013、13頁。

[4] ‘没落両班’とは、もともと歴史学の用語である。鄭震英によると、この用語は一般的に‘朝鮮後期に官職から疎外された田舎の両班’という意味で使われているようである。さらに彼は、朝鮮後期の地方の両班は大部分がこのような存在で、‘没落’という単語は、政治的な意味よりは経済的な意味で使うべきだと述べている。そして、没落両班の概念を、自分達の経済的な基盤を失ったため村落から離脱し、食事を続けることができずかつ、農牛や種子までも借りねばならない‘郷村両班’程度の限定的な意味として使っている。本稿では、権威の概念についてはまだ議論される可能性があるものの、すでに経済的な基盤を失い、日常生活の中で両班の権威を維持できない状況に置かれている人々を‘没落両班’と規定する。鄭震英、『朝鮮時代郷村社会史』、한길사、1998、23-24頁。

[5] 野談集の作者は、初期の‘隨見聞者於于野談’（最初の野談集の『於于野談』の作者の柳夢寅）から後期の‘野談者隨見聞而記錄也’（代表的な野談集である19世紀の李義準の『溪西野談』）に至るまで、一貫して野談は町の実話を記録したものとの認識を見せる。

[6] 本稿の企画は、韓国・朝鮮文化研究会の発表会であった没落両班と農民（庶民）との関係についての議論から始まった。韓国の古小説である <春香伝> に登場する李道令（イドリョン）が暗行御史（アメンオサ）になり、物乞（ナモン）いの姿で南原一帯に至って農民達と会話を交わす場面での問題提起であった。両班の権威がまだ相当高かった朝鮮後期の状況の中で、両班に対しての農民達のそのような態度が果たしてありうることだろうかという指摘があったからである。本稿はそのような指摘についての答えでもある。

文学的な立場から没落両班について調べた研究は、すでに何篇かある。英雄小説を対象に没落の原因を調べたもの[7]、野談作品を通して没落両班の形象と行方を調べた研究がそれである[8]。しかし、英雄小説は、作品の背景が大部分中国となっており、没落両班の様子は確認できるものの、それが素直に当時の実情を反映しているかどうかには疑問が残る。それに対して、金東旭と孫燦植の研究は、文学作品を通じて没落両班の姿を確かめるという側面から考えるとき、一定の成果を収めた。にもかかわらず、これらの論議は、没落両班の形象をそのまま紹介しているか、没落した両班達がどのような行動をしていたかについて分類することに論点を絞っている。従って、同じく野談作品を対象にしても、没落両班の時代的な役割や意味などについて論議する余地はまだ残っているのである。

ここでは、既存研究の成果を受け継ぎながら、没落両班の形象を通じて、没落の原因を探し出す。さらに、彼らが担っていた時代的な役割を突き止めることで、時代人としての意味も積極的に付与してみたい。つまり、彼らは単なる時代の敗北者ではなく、時代的な背景の中ではやむを得ず敗北者の道を歩むしかなかったものの、彼らなりには時代を一所懸命に生きながら、自分達なりの役割を果たしていたことが明らかになることを期待する。これこそが、当時の没落両班を作品の素材として取り上げた野談作者や編集者達の望んだ地点を正しく理解することであると信じている。

本研究の分析資料は野談作品を中心とするが、これは野談作品の内容を総合的に考えた結果である。野談ジャンルは、事実に基づいて生活の実状をより客観的に反映していると認識されているからである[9]。はじめに、両班の地位を失いつつある人物達や、すでに両班層から淘汰され、庶民か庶民以下の生活をしている両班の姿を確認する。続いて、そのような状況に追い出された原因と彼らが担当していた時代的な役割を探してみる。この分析の結果を元に、朝鮮後期の社会構造の一断面が浮かび上がることを期待する[10]。野談は、説話に属すると看做される場合もあるが、実写に力を入れる点では説話と区別するしかない。多く残っている野談集の編集者達の記録は、それを裏づける証拠として考えてもよい。

2. 野談に見られる没落両班の形象

最初に、野談から確認できる実際の形象を紹介しておきたい。19 世紀の没落両班であっ

---

[7] 安圻洙、「英雄小說에 受容된 沒落兩班의 樣相과 意識의 問題」、『語文研究』106、韓國言語教育 研究會、2000。

[8] 金東旭、「『記聞叢話』 이야기와 朝鮮後期 沒落兩班層의 向方」、『半橋語文研究』9、半橋語文學會、1998。/ 孫燦植、「'漢文短編' 에 나타난 沒落　両班의 形象」、『國語教育』92、韓國語教育　學會、1996。

[9] 野談とは、主に歴史的な事件や人物に関わった逸話をもとに作られたジャンルであると理解できる。野談の中には、短い記録体散文から小説に匹敵する作品に至るまでの多様な作品が存在する。従って、野談をそのままジャンルとして見做しがたい側面はあるが、ここでは慣習的なジャンルとして理解する。本稿で対象にした作品は、『記聞叢話』の〈達閣先生文〉以外は、全て『李朝漢文短篇集』から引用した作品である。金東旭、『国訳記聞叢話』、亜細亜文化社、1996。李佑成・林熒澤 譯編、『李朝漢文短篇集』、一潮閣、1992。『李朝漢文短篇集』は、韓国の著名な古典文学研究者二人が多くの野談集から意義のある作品を選別して三巻に編纂したものである。

[10] 朝鮮社会における両班の存在は、庶民との関係では常に絶対権力として位置付けられると誤解される可能性があるが、この作業を通じ、権威を持っている両班とは対照的に、庶民と同等の或いはそれ以下の生活まで落ちてしまった両班の様子が赤裸々に現れるだろう。

た趙秉悳の例である[11]。これにより、野談作品に描かれている没落両班の姿は、単純に文学的な想像力に頼った形象ではなく、時代の様子を反映している事実であることが窺える。

1. 我が家は、落南した後から、門前の薄田を耕して翌年の糧食を用意した。土を耕して種をまくときは、来て働く街人が多いときには百人くらいもいたが、皆は、うちのご飯が町の中で一番だと言い、“食べ物がきれいなだけでなく美味しいし、遠くまで及ぼす恩恵が一番ありがたい。”と言った。(141 頁)

2. 家作は去年に比べて若干減少したが、これは水田の穀物についてのみ言えることで、豆や小豆などはあまり鎌を使うこともないくらいである。醤油を作るものや牛を食べさせるものさえ用意できないから、(お前は)これからこの状態を一体どうすればいいと思うのか。(141 頁)

3. いわゆる農業を営むことも前とは違い、去年あたりまではかろうじて延命はしたが、今はそれも難しいので、三十人近くの家族が飢えて死ぬのではないか心配です。これは誇張した話ではありません。実状がそうです。(142 頁)

上の引用文は、19 世紀の両班が没落の道に追い出されている過程をよく表している。1. は、1811 年から 1819 年の間のある時点で、趙秉悳の親の趙最淳が家族を連れて、ソウルから落郷してまもなくの時期の記述である。権力からは遠ざかっているが、自分の家の農事に 100 名程の町人が手伝いにくることを記しているので、まだ生活に余裕がある。それが 1840 年代になると、2. のようになる。まだ収穫はあるものの、量の少なさを心配している。落ちぶれている状況とまでは言えないが、余裕はまったくない状態である。1850 年代となると、3. の状況まで陥ってしまう。3. には食べることさえ心配する姿が描かれている。食べられるかどうかの問題だけではなく、今度は飢えて死ぬことまで心配し、それが嘘ではなく本当の話だと強く語っている。若干大げさに訴える所はあると思われるが、深刻な状況まで追い込まれていることは間違いない。

野談作品中の没落両班の姿は、基本的に上の引用文の 3. とほぼ同じである。彼らが置かれている状況を基準として三つに大別すると、次のように整理できる。まずは、身分そのものは依然として両班と見なされるが、生活の側面ではすでに両班としての地位を失い[12]、名目上のみの両班として住んでいる場合が挙げられる。二つ目は、両班としての身分は完全になくなり、庶民と変わらない生活を過ごしている場合である。最後に、両班の地位を失うどころか、庶民よりも劣悪たる状況まで落ちぶれ、死の寸前で置かれているか、実際に死ぬことで生を終えるケースが指摘できる。

[11] ハヨンヒ(하영휘)、『兩班の私生活』、푸른역사、2009。趙秉悳についての引用はすべてこの本からのものである。引用文は頁のみ書いておく。この本は、19 世紀の没落両班である趙秉悳が書いた手紙を通じ、当時の両班の生活を分析的に調べたものである。

[12] 両班は、官職への接近と家系の威信によってその身分が決定された。(中略)彼らの大部分は、(中略)学行や財産(土地と奴婢)を兼備することで、両班としての品格を守ることが出来た。全炯澤、「身分制の弛緩と身分の変動」、『韓国史』34、国史編纂委員会、2013、14 頁。

最初のケースとして挙げられるのは「達閣先生」の中の姿である[13]。彼は、親のおかげで学文を習うことができたものの、大科には応じることができず、町の子供達を教えるか、戸籍(ホゾク)や單子(タンザ)（四柱単子）を書き写すことで生活する[14]。達閣先生以外にも、自分の経済的な基盤を殆ど失い、四方の親族に物乞いすることで、読書をする息子達を育てる驪州の許生や[15]、貧しい生活の中でも両班としての基本である読書は廃止できず、妻の苦労で辛うじて生計を立てている士人李某[16]などがこの類型に入れられる。特に李某は、ご飯もろくに食べられない状況であり、妻が読書する夫のために自分の髪の毛を切り出し、それを売って生活を続けている。さらに、外出のために、着られる外出服を探すが、妻から‘今まとっているぼろのみ’という返事を聞くしかない生活をしている窮儒呂生[17]、文学と徳行においては有名で、両班としての面目は維持しているものの、生活面ではすでに土地・器物・奴婢等を売ってしまい、夫人の針仕事で生業を繋いでいく人物もこの範疇に入れられる[18]。

続いて、すでに両班としての地位から淘汰され、庶民的な生活をしている人物の類型を紹介する。先祖は間違いなく両班であるが、すでに庶民と同様の状況まで追い出されてしまい、身の上を嘆いている人物達が代表的に挙げられる。両班の子孫ではあるが、木こりで生きている弟と、嫁入りできる暮らしではないので、ただ年を取っていくしかない姉の話も、庶民と同等またはそれ以下の生活を過ごしている両班の例として見てよいだろう[19]。代々官吏として奉職してきた家門の子孫であるものの、今は自らシャベルを持ち、畔の間で農民と一緒に働いている崔生[20]もまたこの例に属する。衣冠を脱ぎ捨てて赤衫とももひきを着て昼夜なしに機織を手伝い、莫蓙や蓑を織ったりしながら、生きていく驪州の許生[21]

---

[13] 野談集には個々の作品に名前がついてない場合が多い。ここでは、後代の研究者がつけた名前をそのまま使うことにする。

[14] 父兄德分，所持者書冊若干，從事於詩義，只誦洛橋人半句．老專工於科業，未參漢城試一番．史略初卷能知之，近處之兒輩爭聚，戶籍單子能寫之，他鄉之常漢亦來．金東旭、『国訳記聞叢話』169 話、亜細亜文化社、1996、428 － 429 頁。

[15] 驪州舊有許姓一兩班，仁善而貧甚．家有三子，勸課儒業，遍乞於四方親知，以餬讀書兒，以其仁善故，人皆愛之，而副其乞矣．『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 3 話〈廣作〉、356 頁。

[16] 士人李某，家在南山下．安貧好讀書，（－中略－）讀至七年，從窓隙窺之，有一禿頭少僧，臥於窓外．訝然驚怪，出戶視之，乃其妻也．（－中略－）妻曰，吾不食已五日矣．七年中饋，一髮不留．今則勢到弩末，奈何．『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 19 話〈讀易〉、381 頁。

[17] 呂生某，南山之下窮儒也．家貧好讀書，有經濟才，而無所施．賣家舍而食之，一間外廊，夫妻居處．其中不堪飢寒，生謂其妻曰，吾欲有所出，或有上服之可着者否．妻曰，迂哉，吾內外衣服賣食久矣．餘者是身上懸鶉而已．（－中略－）乃着之而出，繼縷垢汚，街童相與指笑．『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 21 話〈呂生〉、383 頁。

[18] 古有金公璠者，永嘉人 - 仙淸以上四五世祖 -，居于漢城府終南山下，以文學行誼，有名京洛．（－中略－）公常對丌書，而疎於産業．世傳土地家藏臧獲，次第盡賣，以資生理，夫人以縫刺爲業，手不暇豫，而晝宵汨沒，以爲糊口．『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 29 話〈陰德〉、396 頁。

[19] 一日，陵軍捉犯樵人以納，權公據理責之，將笞罰之．樵人老總角也．涕泣漣漣，燕辭可白．權公察其像，決非常漢也，問汝何許人也．總角曰，言之慙矣．小生簪縷後裔，早孤，老母今年七十，有一妹年至三十五，尙未嫁，小生年三十，未有室．男妹樵汲以奉養．家近火巢，而今當極寒，不能遠樵，故有此犯樵，知罪知罪．『李朝漢文短篇集』中、第 4 部 24 話〈續絃〉、436 頁。

[20] 昔漢陽士人崔生，其名則忘之矣．此人累世公卿家子弟也．早以文藝聞旣壯，屢擧不中．家貧親老，妻子凄凉．門生故吏多顯者，而勢去崔門，莫肯相恤．（－中略－）明年春，崔生身操鍬鍤，爲農人，起坐於溝澮之間，秋收百石者二之．『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 1 話〈歸鄉〉、353 頁。

[21] 許遂去衣冠，只以一衫一袴掩軆，晝夜助役於紡績，或織席，或織蓑，額額度日．（－中略－）許遂買取，而以爲借人以耕，不但有費，恐不如自己盡力，具牛具耙，自入田中，迎老農善饋置堤上，使之敎耕．『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 3 話〈廣作〉、356 頁。

などもこの類型の人物と言える。特に許生は、先に言及した名目上のみの両班の地位だった許生の子供である。父の代までは両班として生き残っていたのに、子供の代になっては、もう庶民の生活と変わらないレベルまで落ちている。歳月が流れながら次第に転落していく両班の形象を見せてくれる例として実に興味深い。彼らは、もう両班の面目はどうでもいいという状況まで追い詰められている。面目よりは生活のほうが大切と思い、農民の生活までをも嫌がらず、自ら庶民の生活とそれほど変わらない生活をしている。

そして、庶民への転落どころか、人間として最悪の状況に直面している人々の場合である。彼らは徹底的に落ちぶれ、死を待つ状況まで追い詰められている。作品の中では、自分たちが置かれている状況を乗り越える気力を完全に失い、死で生を終える日を待っているか、死を迎える形象に描かれる。

「西瓜核」という名で有名な話は、没落した両班の悲惨な生活を如実に見せてくれる。長い夏日に、連日に五日間も食べられなかった状況の中、壁に付いている干しあがったスイカの空き種を拾い食べている妻を偶然に目撃する柳進士の話である[22]。気力がなく、のろのろと這い入り、妻の悲惨な光景を目撃してしまった柳進士の形象は、没落と言うところではない。しかし、死ぬことは時間の問題ではあるものの、柳進士はまだ生きている。次の例はもっと悲しい話である。娘二人と住んでいる洪生員は、燻造幕（官庁に貢納するメジュ - みそ玉麹 - を作る所）の人たちに物乞いして子供を育てていた。しかし、物乞いするときに受ける侮辱に耐えられず、結局は子供たちと一緒に飢え死にする道を選ぶ[23]。この話は、当時没落の道を歩んだ末、死に直面することとなった人間の有様を、そのまま見せてくれる。五日間ご飯を炊くことができず、家族全員が倒れている話や[24]、飢えることが他人の食事することと同等の暮らしで、家財道具はすでに糊口をしのぐために使ってしまい、釜一つしか残ってないのに、それも火気が無くなってから数ヵ月が過ぎた生活をしている場合[25]などがこの類型に入られる。

3. 没落の原因

両班が自分の身分を維持しながら文化を享有するためには、土地と奴婢に代表される経

---

[22] 時當長夏，連五日未炊，飢困特甚，頹臥外舍矣．內堂寥闃，久無人聲，柳怪之，起而欲入，不能作氣，匍匐而至于內，則妻方以物口嚼，見其入，慌忙掩匿，面帶羞色．柳曰，君何獨喫某物，見我掩匿乎．妻曰，吾若有物可喫，豈忍獨嘗乎．俄於昏倒之際，見西瓜核枯付壁上，取而剖嚼，則乃空殼，方爲恨歎，見君入來，不覺赧然．仍於手中，出示西瓜空核，相與歔欷．『李朝漢文短篇集』中、第3部10話〈西瓜核〉、363頁。

[23] 昭義門外，有洪生員者，鰥居，有二女，而貧不能生，嘗乞食於燻造幕諸役人處，則役夫各收一匙飯而給之，洪生以芥葉裹，飼其二女．一日，生又來乞飯，則役夫漢，醉而辱之曰，生員乃是燻造幕府君堂也，吾輩之上典子也，緣何日日討食．生員含淚退去，遂入其門，過了五六日，門扉尙關．一役夫推扉入去 見之，則生員與二女兒，昏臥流淚而已．役夫憐而急出，煮粥以進之，則洪生謂其十三歲長女曰，汝等，欲喫此粥耶，吾三人艱辛忍飢，此有六日工夫，死將迫矣，可謂前功可惜，今食一器，而彼人繼給則好矣，奈此後日辱，何哉．如是酬酢之際，末女五歲兒，旣嗅粥臭，强起擧首，十三歲兒，以手狎而臥之曰，可宿可宿．翌日，役人等，更往見之，則皆死也．聞者莫不流涕，況乎燻造幕役人之目覩者乎．甚哉貧也，吾家常以窮貧，爲至寃之事，而比之於洪，則無寃歎可也．『李朝漢文短篇集』中、第3部12話〈燻造幕〉、366頁。

[24] 五日不爨，內外僵臥，景色慘沮．（－中略－）當其喪餘，蘋藻俱空．『李朝漢文短篇集』中、第3部1話〈金令〉、349頁。

[25] 四壁徒立，尋常屢空．而時當仲秋，艱食又倍．所謂家産，盡入於斥賣糊口之資，所餘只一食鼎，而絶火亦 月屢矣．『李朝漢文短篇集』中、第3部11話〈孤竹君宅〉、364頁。

済的な土台を所有することが基本条件とされる。ここでは、彼らがどのような理由で経済的土台を失いつつあるかについて考えてみる。作品の中で描かれている姿を通じ、彼らを没落の道に追い出した社会の構造的な側面にも光をあてる。

作品の中から没落の原因を探る前に、朝鮮後期の政治力学的な側面から、多くの両班が淘汰される社会的な構造について言及しておく。朝鮮後期には、官職数が文科・武科あわせて 500 余にすぎなかった。しかし、科挙合格者は、19 世紀の純祖以後の文科及第者だけでも 3700 名を越えている[26]。つまり、たとえ紅牌（ホンペ）（文科の会試に合格した人に与えた赤い合格証）を所持している人でも、自分の経済的な土台を所有していない場合は、すかした腹をなでながら生涯を過ごすしかない状況であった。

このような状況を念頭に置きながら、具体的な原因を確かめてみよう。野談の中の人物は、大体次の三つの理由で両班から転落していく。1. 親、特に父を亡くして経済的な基盤を失い、没落の道を歩む、2. 何代かが続いて科挙に合格できなかったため、社会関係が形成されず、両班から転落する、3. 政治的な関係から両班の地位を失い、淘汰されてしまう、がそれである。

最初のケースとして、前にも言及した木こりの弟と彼の姉の話と、親の死で物乞いまでに落ちてしまった忠清道の名族出身の趙三難の場合が挙げられる。木こりの弟と彼の姉は、両班の子孫ではあるが、父が早く亡くなった為、弟は30才、姉は35才になるまで結婚できず、弟と姉が木こりや水を汲むことで、母を奉養しながら穴蔵のような家で生活している[27]。そして、忠清道の趙三難は、名族の子孫ではあったが、親を早く亡くしたことで、結婚もできず、ひもじい腹を糠で満たすことが金持ちの肉の食べることと同様な状況に置かれている。5、6 年過ぎた後の彼の姿は、完全に物乞いの形象まで転落してしまう[28]。

何代かが続いて科挙に合格できず、両班の地位を失ってしまうケースも一つの原因として考えられる[29]。この場合は、親のおかげで学問はできたので、どうにか生活はしている。しかし、科挙に合格できなかったため、権力へ接近する道が閉ざされてしまい、次第に没落の状況に追い詰められる類型である。まず代々官職に就いていた家門の子孫であり、さらに幼い頃から文章で知られていたにもかかわらず、科挙を受けるたびに落ちてしまい、

[26] 車長燮によると、朝鮮時代の文科及第者の総数は研究者によって若干差があるらしい。具体的には、宋俊浩は 14,620 名（<李朝 生員進士試의 研究>、大韓民國國會圖書館、1970、35 頁）、ワグナ（와그너）は 14,592 名（李光圭、『한국의 家族과 宗族』、民音社、1990、296 頁）、金永謨は重試及第者を含め 14,991 名（『朝鮮支配層研究』、一潮閣、1977）、元昌愛は 14,704 名（「16-7 世紀 科擧制度의 推移」、『清溪史學』9、1992、31 頁）、李成茂は重試及第者を含め 5,137 名（『韓國의 科擧制度』、集文堂、1994、127 頁）である。そして、自分は『國朝文科榜目』（태학사、1984）を基準として 14,681 名と把握している。そして、研究者による文科及第者の総数の差は、削去された人物を把握する過程から発生するとの意見を見せている。それは、削去された人物を排除するか、後日に復録された場合に二重に計るかによって生じたものであるらしい。車長燮、「朝鮮後期 文科及第者의 成分」、『大矩史學』147、大矩史學會、1994、<表 1>。

[27] 注 19）と同一。

[28] 趙三難者，湖右名族，其家世貧，幼失怙恃，不得早娶．而其兄某，文雅踈迂，不自謀生，飢厭糟糠，若食家之飽飫烹宰．（－中略－）居五六年，契活愈窮，菜氣濃面，煤色遍身，華冠縱履，儼然一乞客狀．『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 14 話〈三難〉、372-373 頁。

[29] 科挙は、両班であれば誰でも目標とする試験である。科挙に合格できなかったこと自体が没落の原因とは言いにくい。しかし、何代か（朝鮮時代初期には 3 代だったが、後期になると 3 代続けて科挙に合格できなくても、家門の力で両班として生活できる場合が増える）続けて合格者を出せなかった場合は、没落の道に追い出される一原因となる可能性は高い。

それに従って家は益々乏しくなり、親は老いぼれて妻子はみずぼらしくなった崔生[30]がまさにそのケースである。親のおかげでどうにか字は習ったものの、大科には一度も参加できず、結局は両班から転落してしまった達閣先生も同様の存在であると言える[31]。

最後に、親も存在しており、科挙にも受かったので官吏として生活し、両班の地位を享有しているものの、政治力学的な関係により没落の道を押し付けられる類型が指摘できる。結論から言えば、彼らは朝鮮後期社会の大きな特徴でもある党争の犠牲者だったと考えられる[32]。このケースの人々は、代々官職に就いた家門の子孫でもあり、自分たちも文章で名を知られている。さらに、門生と故吏の中には出世者が多くいる。しかし、形勢が自分の家門から遠ざかっていってからは、助けてくれる人がいなくなってしまった漢陽の崔生が代表的である。読書が好きで、傾国済世できる才能と気質さえ持っていたにもかかわらず、国からの使いを得ることはできず、乏しい生活をするしかなかった呂生[33]も、この類型に属するといえよう。

上で言及した達閣先生も観点によってはこの類型として扱えると考えられる。彼は、全家族が災いを受けて離れてしまい、四方を見まわしても一人の親戚もいない。さらに、奴婢は散らばって逃げて一敗塗地（徹底的に敗れて再び立ち上がれないこと）の状況に置かれている。どうしようもなく住んでいた家を捨てて他郷に移るしかなかった。このような状況を考えてみれば、彼が科挙に受からなかったのは、能力の問題よりは外部からの力に左右された結果であったといえる余地が十分あると思われる[34]。

以上で調べた原因に加え、もう一つ言及したいことがある。前の三つの原因は、外部との関係によるものであった。しかし、没落の道に追い出される重要な原因の一つは、両班の意識の中にあるともいえる。両班としての生活を営むための経済的な支出に耐えることができず、没落の道に陥ってしまうことである。両班そのものの意識が逆説的に両班から離れる道をもたらす。これを裏付ける生々しい資料が前で言及した趙秉悳のケースである。資料を集めた著者のハヨンヒ（하영휘）は、趙秉悳が落ちぶれつつあった原因は、両班としての意識と深くつながっていると指摘する。あちこちに土地を所有しており、土地を貸し与えて小作料を取っていた彼が零細農に陥った理由は、収入に比べて支出が多かったためであるらしい。両班としての体面と礼儀を守るため、両班としての基本土台であった土地を売ってしまう。

まず、子供の科挙の費用のために田圃を売る。子供が科挙のため何回も上京したが、手

[30] 注 20）と同一。

[31] 注 14）と同一。

[32] 16 世紀末頃に始まった党争は、その以後の朝鮮のあらゆる政治・社会的な現象に影響を及ぼしたと言っても過言ではないだろう。

[33] 注 13）と同一。

[34] 17 世紀以後に現れた科挙試験の新たな不正行為の様子は、**朋黨政治・換局政治・蕩平政治**が展開されるにつれ、政局の勢力範囲が党色や地域的に次第に減っていく中、特定の政治勢力が自派勢力を拡大する目的で試みていたことを見せる。そして、このような不正行為は、権力基盤がソウルの小数**閥閲家門**に集中され、社会全般の雰囲気も社会統合機能や葛藤調整装置の機能さえ衰退した**勢道執**権**期**になっていくにしたがって、さらに深刻な状態になっていく。チャミヒ（**차미희**）、「朝鮮後期にはなぜ科挙制度の弊害が発生したのか」、『明日を開く歴史』16、**내일을 여는 역사**、2004、157 頁。

紙に書かれていない場合もあったかもしれない。さらに、掛け布団、敷き布団、敷物、服などを修理する費用と祭祀の扶助のために田圃を売ろうとしている。そして、友達に会いに行くために農牛を売って上京したこともある。食料が尽きているのにもかかわらず、体面と礼儀のために両班の土台である経済基盤をなくしつつある[35]。

4. 没落両班の時代的役割

没落両班達の状況は限りなく苦しかったが、座ったまま死ぬことを待っているばかりではなかった。多くの場合、自分なりに生活の方策を探している。作品の中の彼らの姿は、ただ日常生活を見せるためのものではない。‘文学は時代の反映’という命題が認められるなら、野談作家が彼らのありのままの姿を描いた裏面には、単純な再現を超えて時代の断面をあらわにしようとする意図があったと考えられる。ここでは、野談作品を通じ、没落両班が担当していた時代的な役割を探してみる。この分析を通じ、過酷な状況の中を生きて行った没落両班の生き方に意味のある意義が付与できることを期待する。

最も頻繁に形象化されている没落両班の姿は指導者の役割をしている様子である。この姿は二つに大別できるが、一つは農業を指導することで、もう一つは盗賊化した庶民たちのリーダー役を遂行することである。前者の代表的な存在は、すでに言及された漢陽の士人崔生、士人李某、南山の下に住んでいた窮儒の呂生などである。

崔生は、厳密に言うと、没落両班というよりは没落する可能性が高かった両班といえる。ソウルでの生活が苦しく、家を売って家族と一緒に忠清道の清州に下り、自ら農業を営んで巨富を得た人である[36]。ある年、旱魃と洪水のせいで地域が大飢饉となり、人々が苦しい状況に置かれると、自ら自分の財産を使って穀物や農牛を与えながら、農業に力を尽くすように励む[37]。士人李某の話も同じ種類である。読書をする夫のために自分の髪の毛を切り売りし、何とか生活していった夫婦は、江原道山奥に入り、敷地を定めて畑を掘り起こす。そして、人々を集めて一大村落を作り、一緒に平穏な生活を過ごす[38]。このケースは、自分が治産をし、それを用いて人々に施す内容ではないが、両班としてのリーダーシップを発揮し、生活に苦しんでいた人々を助けることで、社会に貢献する例として見做しても良いだろう。前で紹介した、崔生や驪州の許生も良い例と思われる。自らシャベルを持ち、畔の間で農民と一緒に働いている崔生、衣冠を脱ぎ捨てて赤衫とももひきを着て昼夜機織を手伝い、莫蓙や蓑を織ったりしながら、生きていく驪州の許生は、まさに庶民たちをリードして生きていった姿に他ならない。

---

[35] ハヨンヒ（하영휘）（2009）、145-147 頁。

[36] 明日賣其家受直五百金，奉其父母，率其妻孥，挈家僮二人，婢三人，往湖西之淸州庄.『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 1 話〈歸鄕〉、353 頁。

[37] 崔生約日, 同召其錄中人, 凡五百餘家, 一千三百餘口, 分與其穀曰汝等勿愁飢餒, 力作本業可也.（－中略－）其賣牛而無牛者，買之而給其農饁，分給五穀之種.『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 1 話〈歸鄕〉、354 頁.

[38] 生不得已還持剩錢而來，與其妻，撤家入峽，大坵基址，（－中略－）募民入處，居然成一大村落，而闢草開荒，無非膏腴之上地，歲收穀幾千石，衣食豊足，一生安過云.『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 19 話〈讀易〉、381 頁。

没落両班が担ったもう一つのリーダーとしての姿は、民乱の指導者の役割を成し遂げる様子から見られる。野談には民乱について描いている作品はそれほど多くはない。しかし、朝鮮の 19 世紀は民乱の時代と言ってもいいくらい、民乱が頻繁に発生したのが歴史上の事実である[39]。しかしながら、史料上でどれくらいの割合で没落両班が民乱の指導者としての役割を果たしていたかを確認するのは難しい。それにもかかわらず、民乱の主体である盗賊化した庶民たちを導いている没落両班の姿を、野談作品の中から、確認することはそれほど難しいことではない。自分が治産した財産を用いて盗賊を助ける呂生のような姿は[40]、19 世紀の朝鮮社会を考えてみると、これもまた没落両班の役割としてみなしていいと思う。伝統的な両班の役割からは離れているが、依然として、社会の指導層としての役割をこなしていたとみてもいいからである。

既に修得した知識を生かして庶民たちを教育することで、自分の役割を遂行している没落両班の姿も確認できる。読書は両班の基本の業だと言えるが、これを通して自分の周辺の人々に勉強を教えながら生活を営むことである。朝鮮後期の没落両班が書堂という下級の教育機関の教育者として生計を立てていたことは一般的に知られている[41]。このような姿が描かれている作品の数はそれほどではないものの、確認することはできる。前で紹介した「達閣先生」の場合がいい例となる。その他に、夫人を亡くして家もとても貧しかったため、学童十人余りを集めて教えていた両班が後娶した婦人のおかげで家門を起こした話や[42]、困窮な老人にすぎないが学識が広くて田舎の學究として生きていった趙生員の話も代表的な例として挙げられる[43]。正直に言えば、彼らは、別にほかの能力も手段もないので、生計の手段とは関係のなかった知識を生かして糊口を凌ぐ方策にしたことにすぎない。しかし、事実関係はそうであっても、朝鮮時代を貫く時代の変動という大きい目から見ると、彼らの教育活動は、彼らにとっては生計を立てる手段となり、庶民にとっては、身分を上げることができる基本教育の役割を担うことで、お互いに相互作用を起こした結果をもたらした。

最後に、野談作品の中からは確認しにくい姿ではあるが、朝鮮後期の小説の研究を通じて知られている没落両班の姿も、彼らの時代的な役割として紹介することができると思われる。それは、文化担当者としての役割である。彼らは、生計を立てる手段の一つでもあったが、小説の創作に深く携わっていたと言われている。これは、韓国文学史の中に、彼らの上げた成果として鮮明に刻まれている。韓国の古小説の中で作品が最も多く残されて

[39] 19 世紀の朝鮮社会は、飢饉のような自然災害と三政の紊乱のような虐政などによる民乱が頻発し、民乱の時代と言ってもいいくらい民乱が絶えずに続いた。その形式は、流離、抗租闘争などのような消極的な形態から蜂起のような積極的な形に至るまで多様に現れた。裵亢燮、「19 世紀の民衆運動」、『新編 韓国史』36、国史編纂委員会、2013、290 頁。

[40] 生又取萬緡以來，一人與之錢百緡曰，持此往汝家，以活汝父母妻子，各隨所得，以穀種田器求獻.『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 21 話〈呂生〉、385 頁。

[41] 経済の基盤を失った没落両班は、書堂訓長や雇用訓長のように知識を売って生活を営むか、もっとひどい場合は、農業や商工業などの生業に直接従事しなければならなかった。李家源、『燕巖小說研究』、正音社、1986。

[42] 一士人，家貧喪配，聚學童十餘人敎之.『李朝漢文短篇集』上、第 1 部 8 話〈甘草〉、364 頁。

[43] 近理，有趙生者，窮老能文，爲村學究，以資生.『李朝漢文短篇集』上、第 2 部 19 話〈崔風憲女〉、445 頁。

いるのは‘軍譚小説’であるが、18 世紀末には作られていたことが文献から確認できる[44]。軍譚小説とは、壬辰･丙子両乱（文禄・慶長の役）以後発生し、朝鮮後期に流行ったハングル小説の一種で、軍譚、つまり戦争の話が主な筋となっている作品を指す。その軍譚小説の作家として認められている存在が没落両班である[45]。それ以外にも多くの漢文小説が没落両班の手によって作られたと言われている。彼らは数多くの文学作品を作り出し、時代を超えて今まで、その結果物を残している。当時の彼らにとっては、糊口を凌ぐ方策に過ぎなかったかもしれないが、現代の観点から見るときは、さすがに彼らが成し遂げた時代的な役割として看做してよいと思う。

5. まとめ

朝鮮後期に身分制が乱れるようになったという事実は、今更付け加えていうこともない。このような時代の状況の中でも両班は、その数を増やしつつ、その権威も強固に維持していた。しかし、その渦中、没落の道を歩ませられる両班も多数発生する。本稿では、両班の基本的な土台である土地と奴婢を失い、没落の状況に追い出された人物達の有様を朝鮮後期の野談の中から確認し、その時代的な役割を調べようとした。

その結果、没落両班は没落の程度により、1. 名目のみの両班として存在する場合、2. 庶民に等しいか平民にも劣る生活をしている場合、3. 徹底的に没落し、死が目前に置かれている場合、この三つで大別できることが分かった。そして、その原因として、1. 親、特に父の不在､2. 何代かが相次いで科挙に失敗したことがもたらした微弱な社会的な関係､3. 党争によることと思われる政治的な犠牲、この三つを提示した。

続いて、没落両班が担当していた当時の時代的な役割について考えてみた。没落両班達は、落ちぶれつつあるものの、又状況は限りなく苦しかったものの、ただ座って死ぬことを待ったばかりではなかった。まず、作品の中に最も頻繁に形象化する姿は指導者役であることを指摘し、一つは農業指導、もう一つは民乱の主体の盗賊化した庶民たちのリーダー役を遂行する姿を確認した。又、朝鮮後期の書堂という下級の教育機関の教育者として生計を立てていた様子を調べた。彼らの教育活動は、彼らにとっては生計を立てる手段に過ぎないかもしれないが、庶民にとっては身分を上げることができる基本教育の役割をすることで、お互いに相互作用を起こす役割としての意味を付与した。最後に、野談作品の中からは確認しにくい姿ではあるが、朝鮮後期の小説の研究を通じて知られている姿も没落両班の時代的な役割として紹介した。それは文化担当者としての役割である。当時の彼らとしては糊口の策に過ぎなかったかもしれないその行動が、現代の観点から見るときは、彼らが成し遂げた時代的な役割として看做してよいと指摘した。

以上の作業により、本稿の企画意図であった没落両班の時代的な役割がある程度あらわ

[44] 軍談小説の作品名がはじめて現れる文献は、1794 年に刊行された小田幾五郎の『象胥記聞』である。この本には‘朝鮮小説’として 13 篇の作品名が書かれているが、その中の <張風雲傳>, <張朴傳>, <蘇大成傳> が軍談小**說**として理解されている。

[45] 朴逸勇は、以前の研究を検討し、軍譚小説の作家層が没落両班かそれ以下の階層であることを確認した。朴逸勇、「軍談小**說의** 作者層」、『韓國文學史**의** 爭點』、集文堂、1987、430 頁。

になったと思われる。しかし、韓国文学の中には、没落した両班の様子が野談以外にも、詩や小説にも多数描かれている[46]。それらの形象も、ここで確かめた野談の形象と共に、朝鮮後期の没落両班の様子を見せてくれる大切な資料であるに違いない。これらの資料までをもまとめて総合的に分析してこそ、没落両班についての評価がより立体的に出来上がると思われる。これからの課題であろう。

参考文献

國史編纂委員會 編、『韓國史』34、國史編纂委員會、2013。

金東旭、「奇聞叢話 이야기와 朝鮮後期 沒落兩班層의 向方」、『半橋語文研究』9、半橋語文學會、1998。

金永謨、「朝鮮後期の身分概念と身分構造の變化」、『現像と認識』2 巻 1 号、1978。

金容燮、『朝鮮後期 農業史 研究』、一潮閣、1987。

宮嶋 博史、「朝鮮 後期 支配 階層의 再生産 構造 – 比較 研究를 위한 初步的 探究 –」、『韓國史學報』132、高麗史學會、2008。

朴基炷、「19~20 世紀初 在村兩班 地主經營의 動向」、『맛질의　농민들　– 韓國近世村落生活史 –』、一潮閣、2001。

朴逸勇、「軍談小說의 作者層」、『韓國文學史의 爭點』、集文堂、1987。

徐大錫、「軍談小說의 出現動因과 反省」、『韓國古典小說』、啓明大出版部、1974。

孫燦植、「漢文短篇에 나타난 沒落兩班의 形象」、『國語教育』92、韓國語教育學會、1996。

宋俊浩、「朝鮮兩班考 – 朝鮮朝 社會의 階級構造에 대한 試論」、『韓國史學』 4 、韓國精神文化研究院、1983。

安圻洙、「英雄小說에 受容된 沒落兩班의 様相과 意識의 問題」、『語文研究』106、韓國言語教育研究會、2000。

李佑成、『韓國의 歷史相』、창작과비평사、1983。

李佑成・林螢澤 譯編、『李朝漢文短篇集』（上）（中）（下）、一潮閣、1982。

李重煥 著、ホギョンジン（허경진）訳、『擇里志』、西海文集、2007。

李賢國、「<李海龍傳> 에 나타난 貧困의 問題」、『文學과 言語』9、文學과 言語　研究會、1988。

丁震英、『朝鮮時代 鄕村社會史』、한길사、1998。

チャミヒ（차미희）、「朝鮮後期にはなぜ科挙制度の弊害が発生したのか」、『내일을 여는 역사』16、내일을 여는 역사、2004。

[46] 実際に、詩から没落両班の様子を探るのは容易ではないが、その代表として菊圃姜樸の長編古詩<哀儼殁(エオムビョ)>が挙げられる。この詩は、18 世紀前半期に南人詩壇の方外文衡として君臨したこともある姜樸が没落の道を歩んだ末餓死した自分の族孫 ‘儼’ を悲しんで作った古詩である。詩と比べて小説からは多様な没落両班の形象が確認できる。軍談小説の中の背景は主に中国となっており、議論の余地はあるものの、当時の朝鮮社会の実状が反映されていると考えても良いであろう。

車長燮、「朝鮮後期 文科及第者의 成分」、『大邱史學』147、大邱史學會、1994。
ハヨンヒ（하영휘）、『兩班의 私生活』、푸른역사、2009。
韓榮國、「朝鮮後期의 雇工」、『歷史學報』81、歷史學會、1979。
洪性讚、『韓國近代 農村社會의 變動과 地主層』、지식산업사、1992。